

礫構造をもつ竪穴系埋葬施設の一様相

田村 隆太郎

要旨 古墳時代中期前葉に位置づけられる静岡県菊川市八幡ヶ谷古墳について、礫床（砂利敷き）を伴う埋葬施設に注目し、その評価を検討した。類例は駿河西部の志太地域に認められ、埋葬施設の構造および古墳の立地などの共通性から、前期後葉～中期前葉における「礫床をもつ木棺直葬」の展開を評価した。また、遠江の磐田原台地では前期初頭以前から、その周辺（遠江中・東部）や志太地域でも前期から礫構造をもつ竪穴系埋葬施設が中・小規模墳に認められ、さらに、前方後円墳では礫床と粘土を用いた構造が認められることから、これらを含めた系譜的関連と展開を評価した。

キーワード：古墳時代前期～中期前葉 遠江中・東部 志太地域 竪穴系埋葬施設 礫構造 礫床

1 はじめに

静岡県西部の菊川市には、県内3例目の巴形銅器などが出土した八幡ヶ谷古墳が位置する。遠江の南東部において太平洋へと南流する菊川の流域、その平野の東側丘陵に立地する古墳であり、平成19年に道路建設に先立って発掘調査が実施され、平成21年には調査報告書が刊行された（静岡県2009）。

この調査では、同じ丘陵に立地する古墳時代中期の円墳3基（八幡ヶ谷古墳、瑞泉寺1号墳、志味堂1号墳）が調査されたが、八幡ヶ谷古墳は他の2基より規模が大きく、最も古い時期に位置づけられる（註1）。さらに、埋葬施設の規模や深さも際立っており、礫敷き（砂利）など他にない構造も伴っていた。筆者は調査担当者ではなかったが、現地の発掘や出土遺物の実測などにおいて、この遺構と遺物にふれる機会をいただいている。そこで、本稿ではその礫敷き（砂利）の埋葬施設に注目し、評価を考えたい。

2 八幡ヶ谷古墳の概要

立地と環境（図1） この古墳は、南にのびる丘陵尾根に立地する。同じ丘陵の北側には、瑞泉寺古墳群と志味堂古墳群が分布するが、南側は八幡ヶ谷古墳を境に尾根が低狭になる。したがって、この古墳は丘陵尾根のうち、高所域の先端として意識される場所に築造されたと評価する

こともできる。

丘陵の西側には、菊川流域の平野を望むことができる。その中でも、八幡ヶ谷古墳は谷筋を介して上平川大塚古墳（1号墳）が見える場所に位置している。上平川大塚古墳は既に消滅しているが、前期後葉に位置づけられる墳長30m前後の前方後円墳であり、三角縁神獣鏡などが出土している（西郷2010、大谷2010）。

墳丘（図2） 墳丘は径約21mの円形であるが、南側の基壇状部分を含めると径約24mになる。検出した約3mの高さは、尾根の削り出しによってつくられて

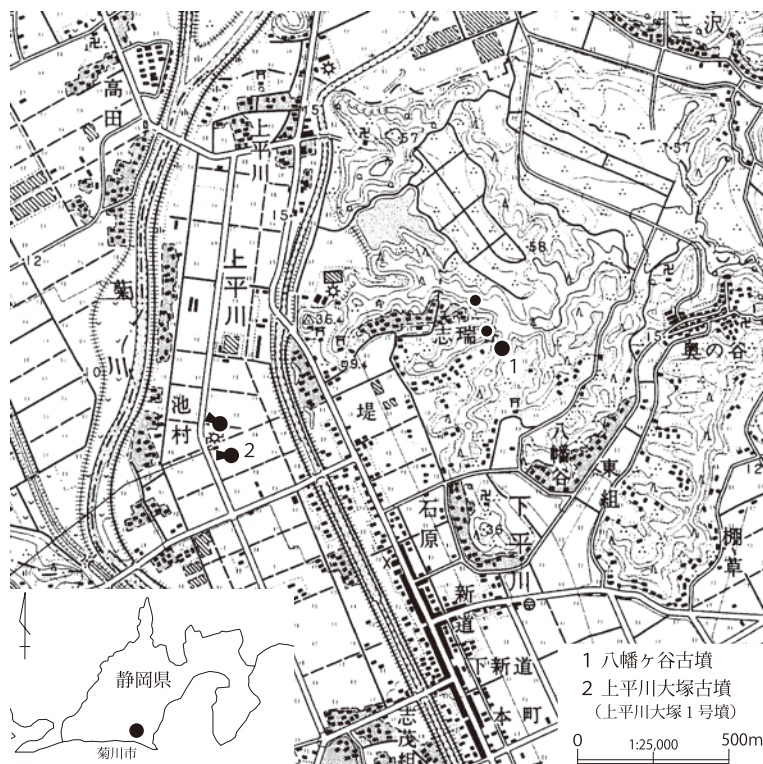


図1 八幡ヶ谷古墳の位置と立地

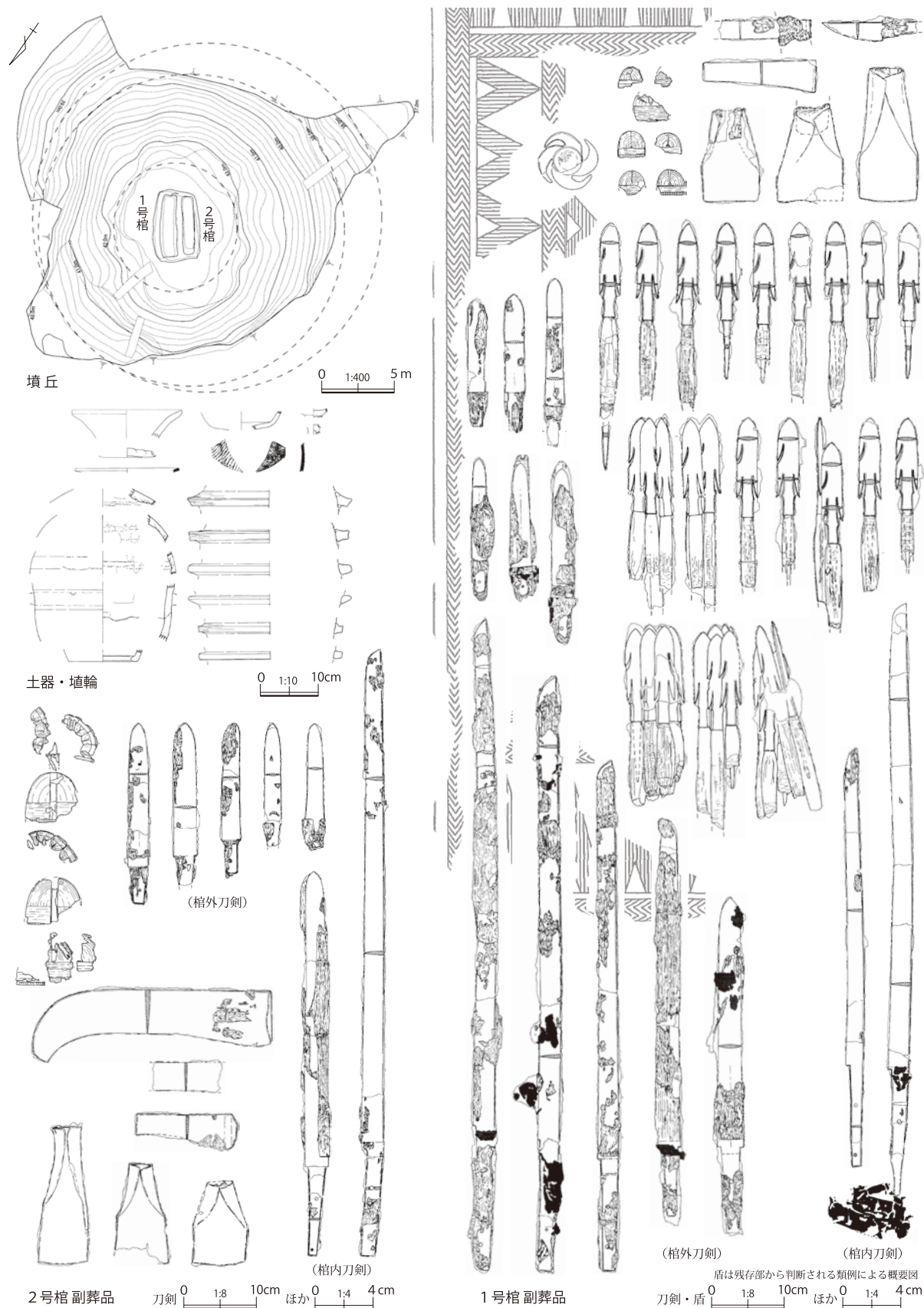


図2 八幡ヶ谷古墳の概要

いた。したがって、盛土は極めて少なかったと推測できる。葺石は認められなかったが、埴輪の破片が墳丘周囲と墳頂の墓壇覆土中から出土している。

埋葬施設（図3） 墳頂部の中央に墓壇が発見され、その中に並列する2基の木棺直葬（1・2号棺）が検出されている（註2）。墓壇覆土の土層断面からは、2号棺の埋葬が先に行われた可能性が指摘できる。しかし、明瞭な切り合い関係ではなく、同一墓壇内の埋納順を示しているように観察できた。なお、墓壇の比較的深い位置からも埴輪片が出土していることから、2

基の埋葬において埴輪片が混在する過程があったと判断できる。

埋葬施設の主軸（頭位）は、いずれも南東方向にある。尾根の方向とは斜交するが、眺望のある谷筋に対して横位置になる。墓壇は約5.0m×3.2mの平面方形、深さ約0.5mである。北東側の1号棺は約4.2m×1.1mの平面方形で深さ約0.6mの断面箱形、南西側の2号棺は約3.9m×0.8mの平面方形で深さ約0.3mの断面箱形である。底面は、1号棺が約4.1m×0.7m、2号棺が約3.5m×0.7mである。

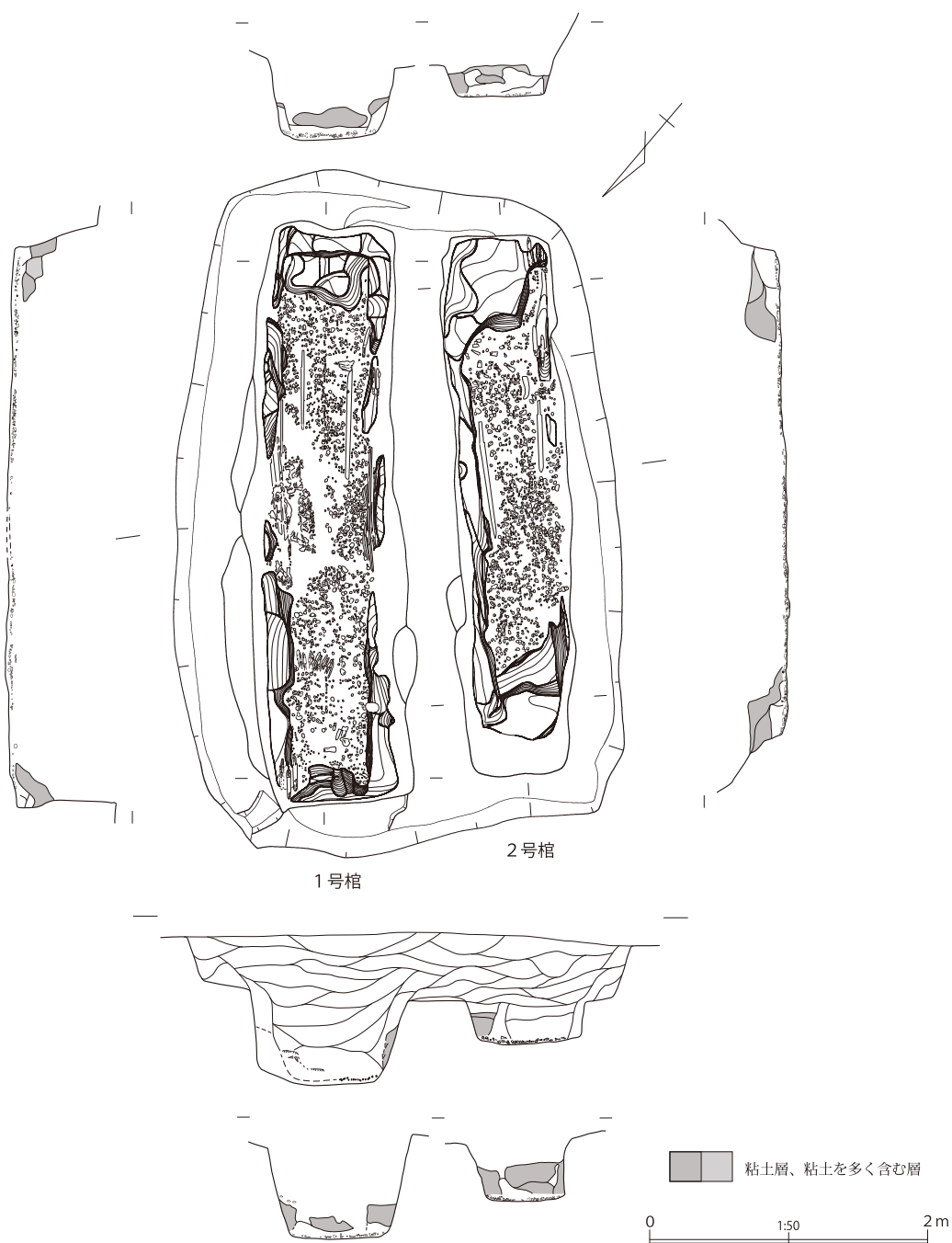


図3 八幡ヶ谷古墳の埋葬施設

なお、同じ尾根に立地する中期後葉の瑞泉寺1号墳でも、2基の木棺直葬が並列する。しかし、同一墓壇ではない。また、八幡ヶ谷古墳の埋葬施設は、泥岩・砂岩層を深く掘り込んで設けられており、後述する礫と粘土の構造のほか、この点も瑞泉寺1号墳などにはない特徴として指摘できる。

2基の木棺直葬は、基本的に同じ構造をもつ。底面は概ね平坦であり、全域に小さな礫（砂利）が敷かれている（註3）。周縁には粘土が認められ、これらの検出状況から、組合式の箱形木棺が設置されていたと判断することができる。なお、礫床に側板や仕切板に関わる造作は認められなかったが、2号棺の北西部の礫床において、木棺の痕跡と思われる僅かな段差を観察している（註4）。また、1号棺の小口壁においては、木棺の側板の端が入り込んでいた可能性が指摘できる凹みが認められている。

粘土は、木棺部分の周囲全体に認められる。ただし、1号棺では、ある程度の埋土をした上に粘土が施されていることから、木棺を覆うような構造ではなく、一定の高さに粘土面を設けることによって、埋葬・儀礼上の段階面を意図した可能性が考慮される。一方、小口部では粘土が厚く、木棺上に被覆した粘土も認めることができる。2号棺では棺外副葬品（鉄剣）の上に粘土が及んでいることから、副葬儀礼後の粘土被覆として把握することもできる。

粘土に囲まれた範囲は、1号棺が長さ3.8m程、幅0.5～0.6m、2号棺が長さ2.5m程、幅0.4～0.6mであり、いずれも頭位側が幅広になる。また、先述した2号棺北西部の礫床の段差は、粘土の内法と位置が一致する。

副葬品（図2） 1号棺では、棺内に竪櫛7以上、鉄刀2、鉄鏃37、刀子1、直刃鎌2、袋状鉄斧3、棺外に鉄刀3、鉄剣8、巴形銅器1、盾（漆）1が副葬されていた。2号棺では、棺内に複合竪櫛3以上、鉄刀1、鉄剣1、曲刃鎌1、直刃鎌2、袋状鉄斧3、棺外に鉄剣5が副葬されていた。

1・2号棺の棺外にある短い鉄剣については、長さや出土位置からヤリ先の可能性も指摘できる。ただし、装具にヤリである根拠を得ることはできなかった（註5）。また、1号棺の巴形銅器と盾は、左右離れた位置から出土していることから、装着されていたとは断定できない。1号棺の鉄鏃は、二段逆刺（上段片逆刺）鏃の同種多量の束である。刀剣は、漆塗の木製装具が一部残存しており、楔形把頭や直弧文の把縁が認めら

れるものもある。農工具は、大きさや造りから非実用品の可能性が指摘できるが、2号棺の曲刃鎌は比較的大きく、副葬位置からも異なる性格が考慮される。

本墳の埋葬時期は、主に鉄鏃などの副葬品の特徴から中期初頭～前葉に位置づけることができる。

3 埋葬施設の特徴に関する検討

八幡ヶ谷古墳の埋葬施設は、同一墓壇内の二棺併葬であることに加えて、組合式の箱形木棺の直葬であり、棺周囲の粘土の使用、礫床といった構造の特徴をあげることができる。

（1）諸特徴に関する周辺地域の状況

二棺併葬 周辺地域（遠江・駿河）をみると、複数の埋葬施設が並ぶ古墳は少なくなく、木棺直葬であれば地域や時期、または古墳の規模を問わず確認することができる。しかし、同一墓壇の二棺併葬は少なく、明確なものとしては、焼津市小深田西1号墳、藤枝市秋合6号墳、同11号墳、磐田市磐田67号墳、森町文殊堂8号墳をあげることができる（図4、註6）。

小深田西1号墳は、駿河西部の志太平野に立地する一辺10m強の方墳である。併葬する内の南側の第1主体部には、舟形木棺を推測させる痕跡が認められている。鏡や玉類の副葬と土器の出土があり、前期中葉に位置づけられる（焼津市1984）。秋合古墳群は、志太平野の北西丘陵に立地する。6号墳は径15mの円墳、11号墳は一辺約10mの方墳であり、いずれも箱形木棺と判断される直葬2基が並ぶ。11号墳は周溝等から出土した土器から前期に位置づけられており、6号墳も調査報告書では中期に位置づけられていたが、遡る可能性が指摘されている（藤枝市1980・2007）。磐田67号墳は、磐田原台地西縁に位置する。中期中葉頃の径約18mの円墳であり、断面箱形の木棺直葬2基が並ぶ。鑄造鉄斧や鈴といった特徴的な副葬品がある（磐田市1977）。文殊堂8号墳も中期中葉の径約16mの円墳であり、古墳群形成開始の築造に位置づけられる。片鎚造りの短頸鏃などの副葬のほか、割竹形木棺の小口には粘土が用いられ、棺床には礫を充填した小土坑を伴うといった特徴がある（静岡県2008）。

以上のように、同一墓壇の二棺併葬については、八幡ヶ谷古墳を含めて中期中葉以前にあり、中・小規模の円・方墳に認められる状況にあると把握することができる（註7）。

木棺形態と粘土の使用 木棺には割り貫き式の割竹形木棺、組合式の箱形木棺などの構造および形態の種類があり、さらに詳細な分類研究も進んでいる。しかし、木の棺材が残っている場合は極めて少なく、多くの古墳では、主に棺床の断面形によって木棺の形態等を判断している。

古墳時代の木棺については、岡林孝作によってコウヤマキ材を選択的に使用する近畿を中心とした地域圏が把握され、前期の舟形木棺から割竹形木棺、中期以降の組合式木棺の卓越が指摘されている。さらに、この地域圏の外側では樹種に多様性があり、在地墓制と近畿周辺から波及した形態が重層しながら「地域性豊かな棺の多様性を示す」と評価している（岡林2011）。遠江・駿河は、この地域圏の境界域にあたる。弥生時代以来の墓制では箱形木棺が主流であり、割竹形木棺は前期において後出的に認められるようになるが、その後も地域によって双方が認められ、混在する古墳群もある。また、後述する粘土と礫による構造上の諸要素においても、いずれかの木棺形態に偏る傾向はあるものの、必ずしも限定されるわけではない状況が確認できる（註8）。

粘土の使用について、とくに遠江では、割竹形木棺の小口に粘土を施した木棺直葬が多く確認できる。しかし、前期後葉の浜松市馬場平古墳（墳長約48mの前方後円墳）では、箱形木棺に粘土槨に類する構造をも

ち（引佐町1983）、中期末葉～後期前葉の袋井市愛野向山B12号墳（径約8mの円墳）や袋井市高尾向山3号墳（径約10mの円墳）でも、箱形木棺の周囲に粘土を施している（袋井市1996・2004）。なお、愛野向山B12号墳では、木棺の周囲に礫を多用した別の埋葬施設が並列している。また、高尾向山3号墳では、小口に礫も使用されており、粘土と礫の使用は併用されることが確認できる。

礫の使用 礫の使用については、礫積み製の堅穴式石室などがあるほか、箱形木棺の棺側に礫を並べる場合、割竹形木棺の小口に用いる場合などが比較的多く確認できる。さらに、棺上に礫を施すものなども少数ながら確認されており、前期から後期前葉にかけて多様な利用をみせる。

こうした中で、遠江では浜松市辺田平古墳群や袋井市雲座D1号墳、袋井市若作C1号墳、菊川市寺の谷3号墳などに礫床を認めることができる（浜北市2000、袋井市1972・1990、小笠町1991）。その中でも、寺の谷3号墳は八幡ヶ谷古墳と同じ菊川流域の地域にあり、粘土床に礫を敷くという特徴的な構造や埴輪を伴う点が注目される。しかし、いずれも中期後葉以降の小規模墳であり、用いられる礫は砂利ではない。

その一方で、駿河西部の志太平野の地域（志太地域）では、八幡ヶ谷古墳との類似が指摘できる礫床の木棺直葬を確認することができる。

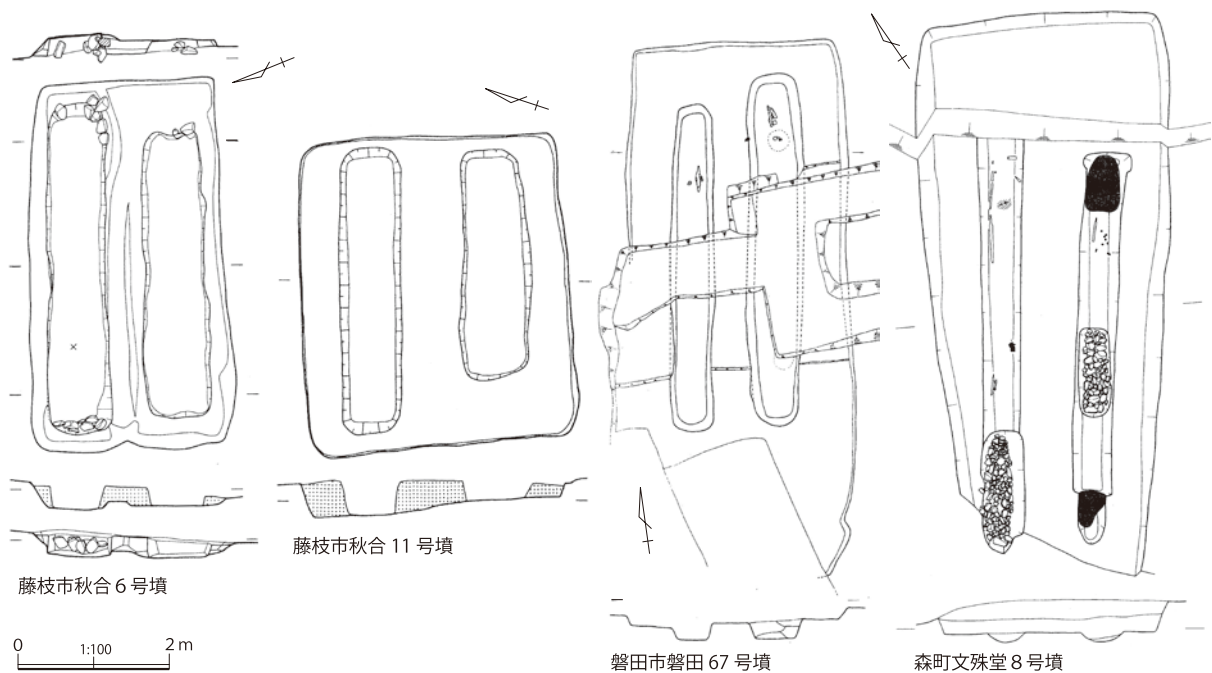


図4 遠江・駿河の二棺併葬（同一墓墳）

(2) 志太地域の礫床をもつ木棺直葬

志太地域は、前・中期をとおして前方後円(方)墳が認められず、比較的小規模な円・方墳が展開する特徴的な地域である。滝沢誠は、この志太地域における前・中期の小型墳について研究し、次のように成果を明らかにしている(滝沢2003)。

滝沢氏は、古墳・古墳群の存在形態の変遷を整理したうえで、前期前葉における箱形木棺の長大化、前期後葉に出現する割竹形木棺と箱形木棺との関係のほか、棺床の小土坑や土器の副葬といった埋葬施設の特徴について全国の事例や研究史を含めて検討し、その背景として、伊勢や近畿との交流関係の様相を指摘している。さらに、礫の使用をa～e類(a類:棺周囲、b類:棺側、c類:棺床と棺周囲、d類:棺床、e類:棺小口)に分類し、e類は割竹形木棺や長大な箱形木棺と関係すること、a・b類とd類とは直列の系譜関係では理解できないことなどを指摘している。そして、磐田市竹之内原1号墳や磐田市新豊院山2号墳の存在もふまえて、「典型的な竪穴式石室の導入に先駆けて礫を使用した埋葬施設が遠江・駿河地域に展開し、そのいくつかの流れを汲む埋葬施設が前期後葉以降に営ま

れた志太平野の小型墳にも引き続き採用された」との見方を示している。

八幡ヶ谷古墳の礫床をもつ木棺直葬については、滝沢氏の分類におけるc・d類に類例を求めることができる。そこで、この諸例について、調査報告書等の刊行物と調査資料の閲覧により得た概要を報告する(註9、図5・6)。

島田市鳥羽美古墳(図6) 志太平野の西奥部の北側丘陵に位置し、大井川の支流がある東へ舌状にのびる尾根の先端に立地する。

墳丘は、小高い地形と盛土により築造された一辺20m程の方墳であり、埴輪や葺石はない。墳頂には、2基の木棺直葬(第1・2主体部)が並ぶ。主軸は尾根に並行する。

北側の第1主体部は、墳丘の中央に位置する。墓壇は約5m×2mの長方形であり、深さは地山面から約0.9mである。その中の約3.8m×1.2mの方形範囲において、細かい礫(砂利)が厚さ約0.1mに敷かれており、その上に組合式の箱形木棺を設置したと把握されている。礫床範囲の両端には、小口板の設置跡と推測される溝状の凹みが認められ、東小口では、その棺

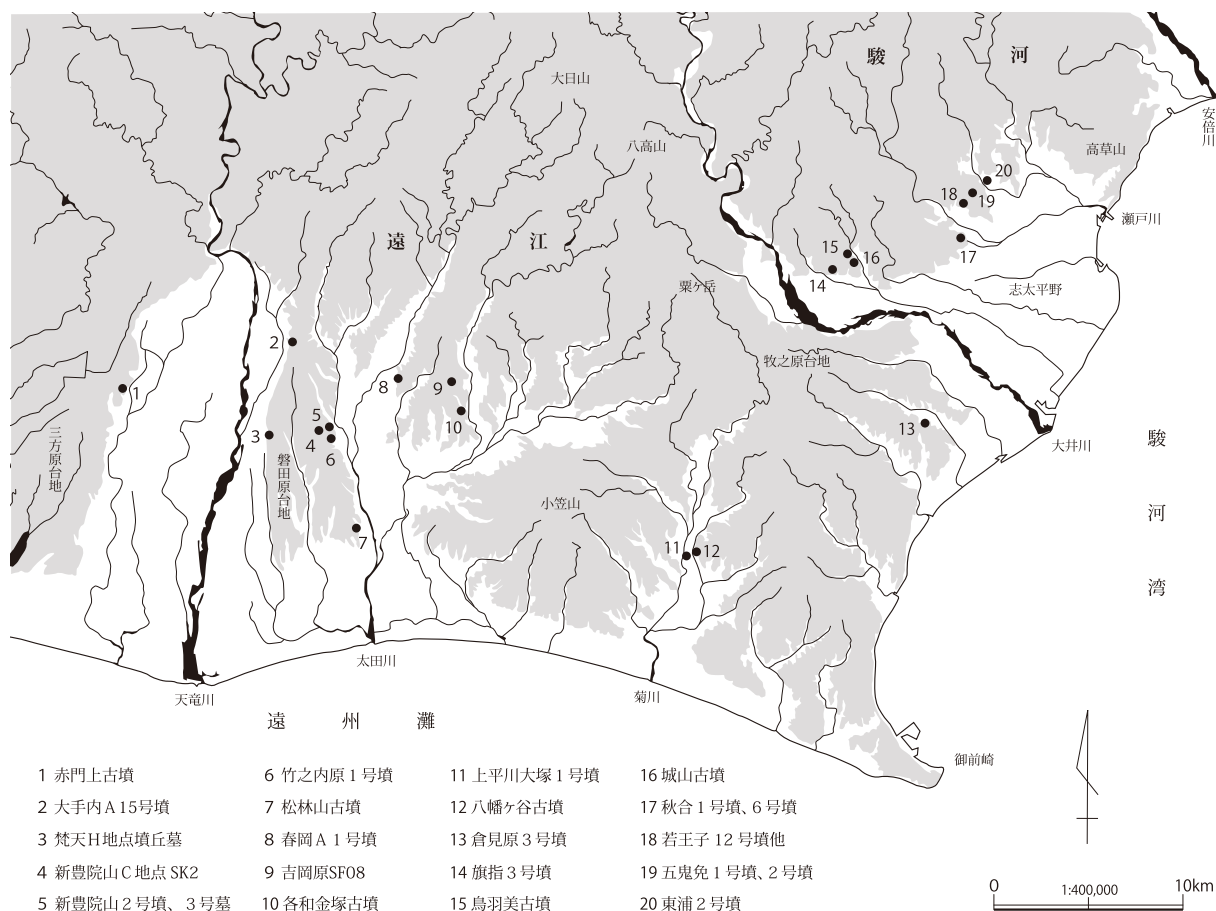


図5 中期前葉以前の礫構造をもつ竪穴系埋葬施設の分布

外側に小石が並べられている。副葬品は鉄剣1、ヤリ先1、鉄鏃17、銅鏃3、不明鉄製茎部1であり、前期末葉頃に位置づけられている。

南側の第2主体部は、その北縁を第1主体部の上に重ねるようにして設けられている。長さ約3.3m、幅1.2~1.5mの長方形であり、深さは地山面から約0.4mである。底面の全体に対して、礫（砂利）が0.05~0.1mの厚さに敷かれている。床面は概ね平坦である。礫床の0.05m程上面において、中央部一帯に広がる朱が認められている。副葬品の出土はない。

藤枝市五鬼免1号墳（図6） 南へ舌状にのびる丘陵上に古墳群があり、その中でも、尾根の先端に1号墳が立地する。したがって、1号墳からは、東に面する

葉梨川流域から南方向まで、広く平野を望むことができる。

墳丘は、地形と盛土による径20m程の円墳である。埴輪や葺石はないが、周溝から壺が出土している。墳頂には、2基の木棺直葬（東・西棺）が並ぶ。2基はわずかに切り合っており、西棺が先行する。ただし、いずれも墳丘の中央には位置していないことから、概ね同時期に並び設けられたものと理解することもできる。埋葬施設の主軸は尾根に並行する。

西棺は、約5.7m×1.1~1.7mの方形、深さは約0.3mである。礫構造はなく、銅鏃3、刀子1、鈍1、ガラス小玉2が出土している。

東棺は、約6.7m×2.5mの長方形の墓壇に約6.4m

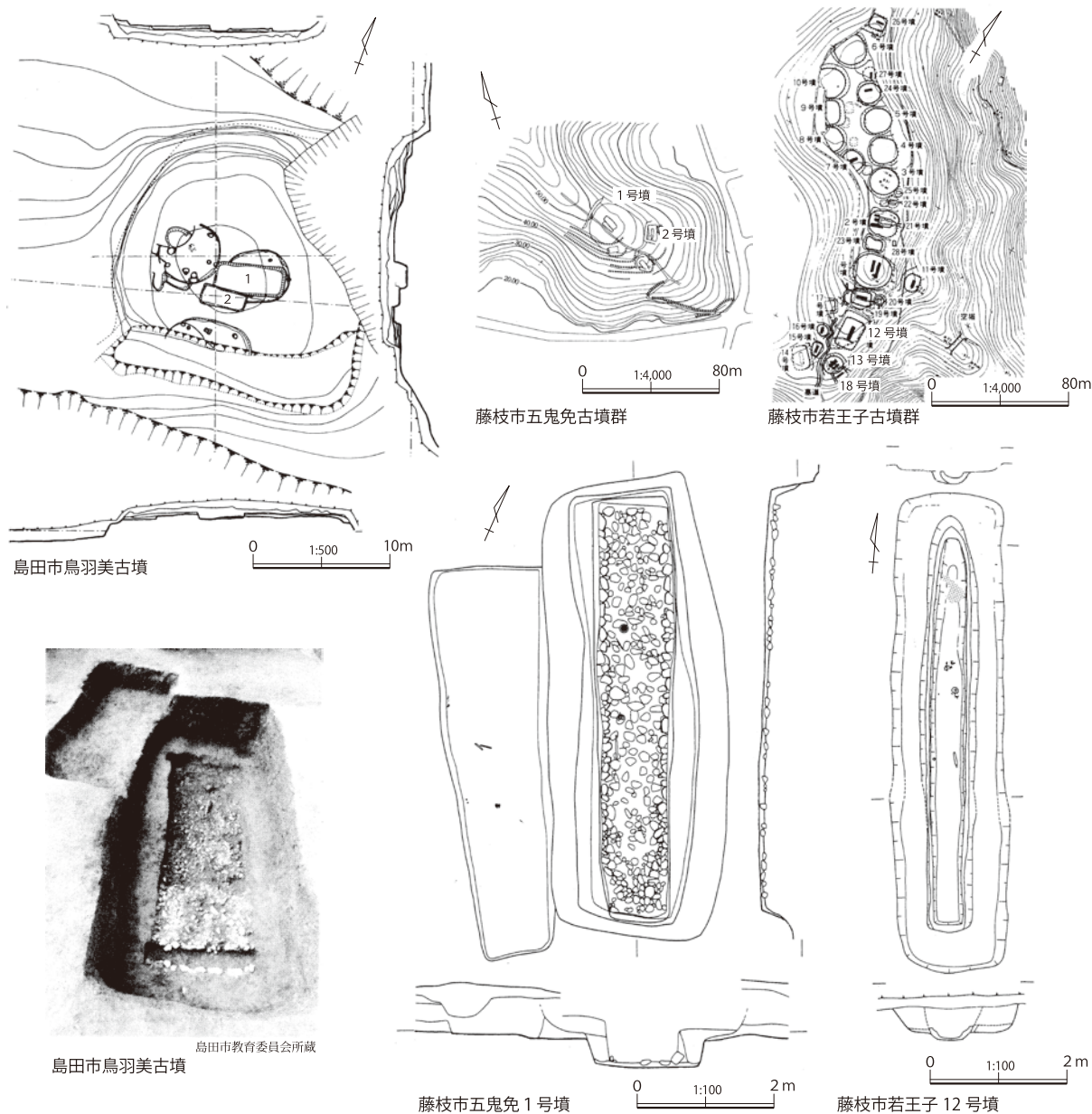


図6 志太地域の礫床をもつ木棺直葬

×1.8m、深さ0.5m程の木棺直葬が設けられている。そして、その底面全体に河原石を雑然と敷いた礫床を伴う。さらに、礫床の周縁には2段積みや大き目の石材による縁石構造がめぐり、その南小口が舟形のように尖頭状を成す特徴が指摘されている。ただし、平坦な礫床などからは、断面箱形の木棺が推測される。縁石の内側に木棺が設置されたとすれば、その規模は5.6m×0.8m程になる。副葬品は鏡1、櫛1、剣1、鉄鏃3、鉞1、鉄斧1である。なお、記録写真をみると、鏡の直下に木質の残存を認めることができる。ただし、その方向は主軸に直交している。

時期は、出土遺物から前期後葉頃に位置づけることができる。

藤枝市若王子12号墳（図6） 瀬戸川流域の西側丘陵に立地する円・方墳群のうち、12号墳は、最も高所に分布する前期～後期の27基の一群にあり、南にのびる尾根の南端部に位置する。したがって、最も眺望の良い場所に立地する古墳として評価できる。

墳丘は、地形の削り出しなどによる約18m×11mの方墳であり、葺石や埴輪はない。中央に約7.6m×1.7mの方形の墓壇があり、その中に約6.9m×0.7mの舟形の棺床が把握されている。さらに、一部の断ち割りによるものではあるが、木棺部分の下に礫床（砂利）を確認している。

副葬品には、分布の東限として注目される倒卵形の車輪石のほか、鉄剣1、鉄鏃1、勾玉、管玉、ガラス小玉、さらに水晶製算盤玉がある。時期は前期末葉に位置づけられ、古墳群形成開始期に築造された古墳として評価できる。

藤枝市若王子13・18号墳（図6） 12号墳の南に位置し、尾根南端の一段下がった場所に立地する。

13号墳と18号墳は切り合う関係にあり、いずれも径10m前後の円墳である。礫床を伴う埋葬施設は、良好な状態で検出されていない。調査記録の写真をみると、18号墳の西寄りに礫（砂利）の広がり部分が部分的に検出されており、土層断面によって、断面U字形の木棺部の下にあたる事が確認できる。

出土遺物が少ないために、時期の特定は難しい。古墳群における位置などを考慮するならば、12号墳に後続する時期の可能性が評価される。

藤枝市東浦2号墳 西にのびる丘陵先端部に分布する古墳群であるが、2号墳はその北東部に位置しており、尾根の先端という立地ではない。

一辺14m程の方墳であり、割竹形木棺の直葬2基、

箱形木棺の直葬2基のほか、礫床1基が検出されている。礫床は中心的な位置ではなく、規模は約1.9m×0.6mである。副葬品の出土はないが、他の埋葬施設を含めて中期前葉～中葉に位置づけられている（藤枝市1988）。

このほかに、藤枝市翁山遺跡における長方形の礫床をもつ円形周溝墓について、増井1978に記載があり、滑石製白玉の出土などから中期中葉に位置づけられている。

八幡ヶ谷古墳との共通性 八幡ヶ谷古墳の類例としてあげた志太地域の諸古墳について、とくに前期後葉～末葉頃の3基（鳥羽美古墳、五鬼免1号墳、若王子12号墳）は、中・小規模の円・方墳ではあるが、単独的な立地もしくは古墳群開始期の築造であり、優先的に丘陵尾根の先端部に築造されるという共通した特徴をもつ。さらに、鳥羽美古墳と若王子12号墳に砂利が用いられていることや、鳥羽美古墳と五鬼免1号墳では箱形木棺が推測され、同一墓壇ではないが、二棺が並ぶことも類似要素として考慮される。

以上から、志太地域と菊川地域に分布する「礫床をもつ木棺直葬」は、前期後葉～中期前葉において、近い系譜的關係や特質の中で構築された可能性を評価することができる。ただし、埋葬施設の規模や木棺形態、粘土の使用、礫床の範囲や造作などは各古墳で差異もある。緩やかな共通性の中において、各古墳の地域や時期、または階層的位置に関連した個性の発揮があったものと理解したい。

（3）礫構造の系譜について

この「礫床をもつ木棺直葬」に関する系譜的評価をさらに考察するにあたって、同時期（前期～中期前葉）の他の埋葬施設をみると、遠江中・東部から志太地域に礫構造の展開を確認することができる。

磐田原台地の小規模墳（図7） 磐田市竹之内原1号墳は、磐田原台地東縁部に立地する一辺9m強の方形墳であり、礫床と周囲に積まれた礫構造を伴う埋葬施設が検出されている（磐田市教1992）。同じ磐田原台地東縁部の新豊院山3号墓（一辺約12mの方形墳）では、礫床はないが、断面箱形の木棺部の周囲に礫を多用した埋葬施設をもつ（磐田市2006）。竹之内原1号墳からは土器と副葬品である鉄剣1、新豊院山3号墓も土器と副葬品である鉄剣1、鉞1、鉄鏃2が出土しており、前期前半に位置づけられている。

磐田原台地の西縁部では、磐田市梵天遺跡H地点墳

丘墓（径10m程の円形墳）において、礫構造を伴う埋葬施設が発見されている。箱形の木棺が推測され、周囲の礫積みと疎らな礫床のほか、小礫を多く含む埋め土が認められている。土器と副葬品である玉類（勾玉1、管玉12、ガラス小玉40程）が出土している（磐田市2003）。磐田原台地北部の西縁に位置する磐田市大手内A15号墳は、一辺15m程の方墳であり、その第2埋葬施設において周囲に礫を用いた構造が認められる。第2埋葬施設からの出土遺物はないが、土器や第1埋葬施設の副葬品（鉄剣、鉄鏃、鈍、玉類）から前期後半の古墳とされる（豊岡村2000）。

このように、磐田原台地では、古墳時代の初頭頃から礫構造をもつ竪穴系埋葬施設を確認することができる。それぞれに構造の差異はあるが、いずれも木棺の周囲に礫を用いる構造であり、小規模な円形または方形の墳墓であることや、長軸2m程度の箱形木棺が推測される点も共通している。

なお、新豊院山遺跡C地点の土坑墓（SK2）において、周縁の礫使用が認められ、土坑墓上面から弥生土器片の出土が報告されている（磐田市2005）。また、新豊院山2号墳の前方部に礫構造をもつ埋葬施設が発見されており、磨製石斧の出土から弥生時代の可能性が指摘されている（磐田市2006）。不確実な状況ではあ

るが、出現が弥生時代に遡る可能性も考慮される。

前期の中・小規模墳における展開（図8） 磐田原台地の周辺地域においても、前期の礫構造をもつ竪穴系埋葬施設を確認することができる。

掛川市吉岡原遺跡では、段丘縁辺に立地する無墳丘の小型土坑（墓壇）SF08において、周囲に礫をめぐらせ、その上に粘土を用いた構造が把握されている（掛川市1987）。

志太地域においても、礫床をもつ木棺直葬とは別に、棺側等に礫を用いる前期古墳を散見することができる。島田市旗指3号墳は、一辺14m程の方墳である。長さ約2.3mの棺部分の周囲について、小口部には大きめの礫、両側には小さな礫を用いた構造をもつ。副葬品はガラス玉3点である（柴田1978、島田市2003）。藤枝市秋合1号墳も一辺14m程の方墳であるが、礫は長さ約3mの木棺部の片側側面にのみ用いている。二棺併葬の秋合6号墳（図4）も礫は一部の使用に限られる。副葬品は、1号墳では鉄剣1、鉄鏃4、鈍1であり、6号墳は不明鉄片のみである（藤枝市1980・2007）。藤枝市五鬼面2号墳では、方形に礫を配置した埋葬施設と礫詰め排水溝が検出されている。礫床をもつ1号墳（図6）の斜面下方に立地する一辺9m以下の方墳であり、副葬品はない（八木1978、藤枝市2007）。

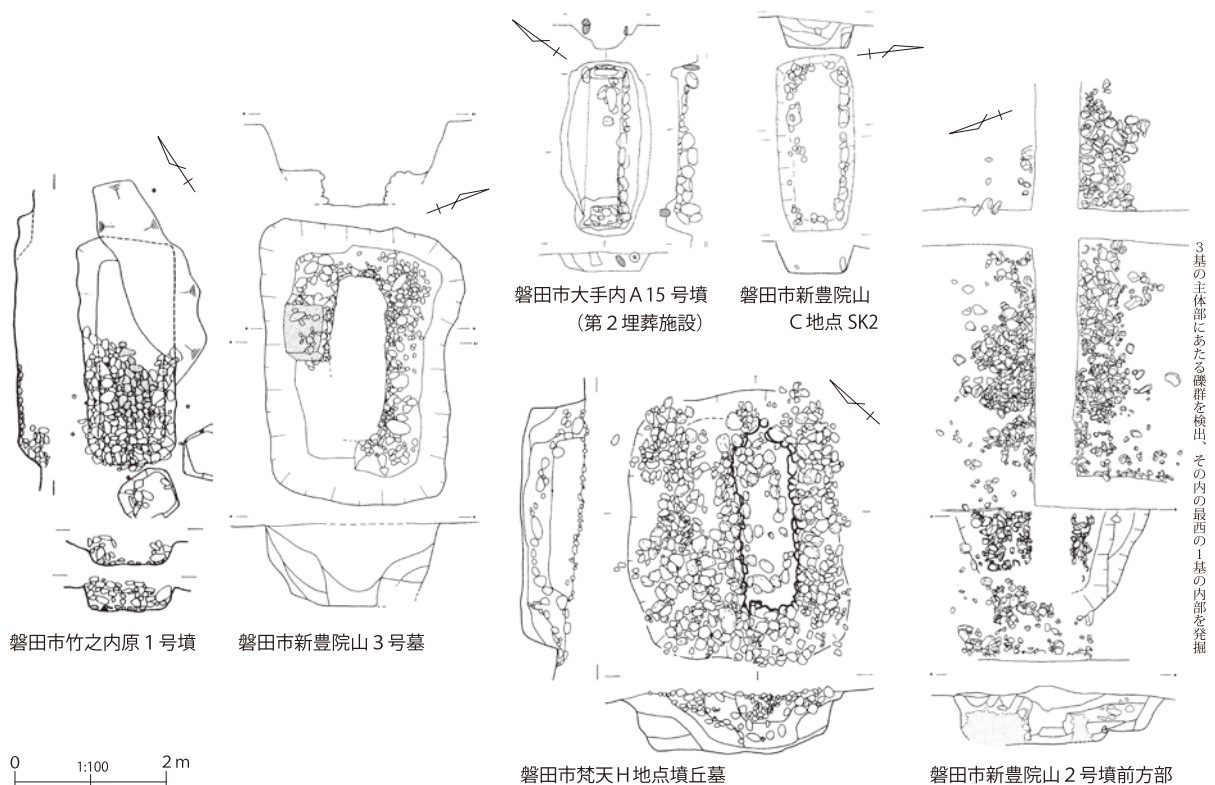


図7 前期の礫構造をもつ竪穴系埋葬施設1（磐田原台地の小規模墳）

以上の磐田原台地とその他の諸例は、棺部分の周囲に礫を用いる構造で共通し、多くは箱形木棺が推測される。また、これらは比較的小規模な円・方墳または無墳丘であり、一部に棺の長大化が認められるものの、立地、墳丘および副葬品の内容などは「礫床をもつ木棺直葬」に比べても劣る傾向にある。

しかし、牧之原市倉見原3号墳や袋井市春岡A1号墳では、その特徴は異なってくる。倉見原3号墳は、一辺15m以上の方墳であり、土器と副葬品である鉄剣2、鉞1、ガラス小玉1が出土している。埋葬施設は、約5.5m×3.8mの墓壇内において、長さ約3.3m、幅

約0.8mの棺部分に礫積み構造がめぐる。これまで取りあげてきた礫構造をもつ諸例に比べて、長大な埋葬施設であり、明らかに用いられる礫の量が多い（山村・黒田1968）。さらに、袋井市春岡A1号墳では、計8tにもなる多量の礫によって、長さ3m程の箱形木棺に礫積みと礫床をもつ埋葬施設が構築されている。径約24mの円墳であり、副葬品には鉄剣1、ヤリ先1、鉞1、鉄斧1、鉄鏃10以上がある（袋井市1998、註10）。

このように、礫構造をもつ堅穴系埋葬施設は、少なくとも前期前葉までには磐田原台地の小規模墳におい

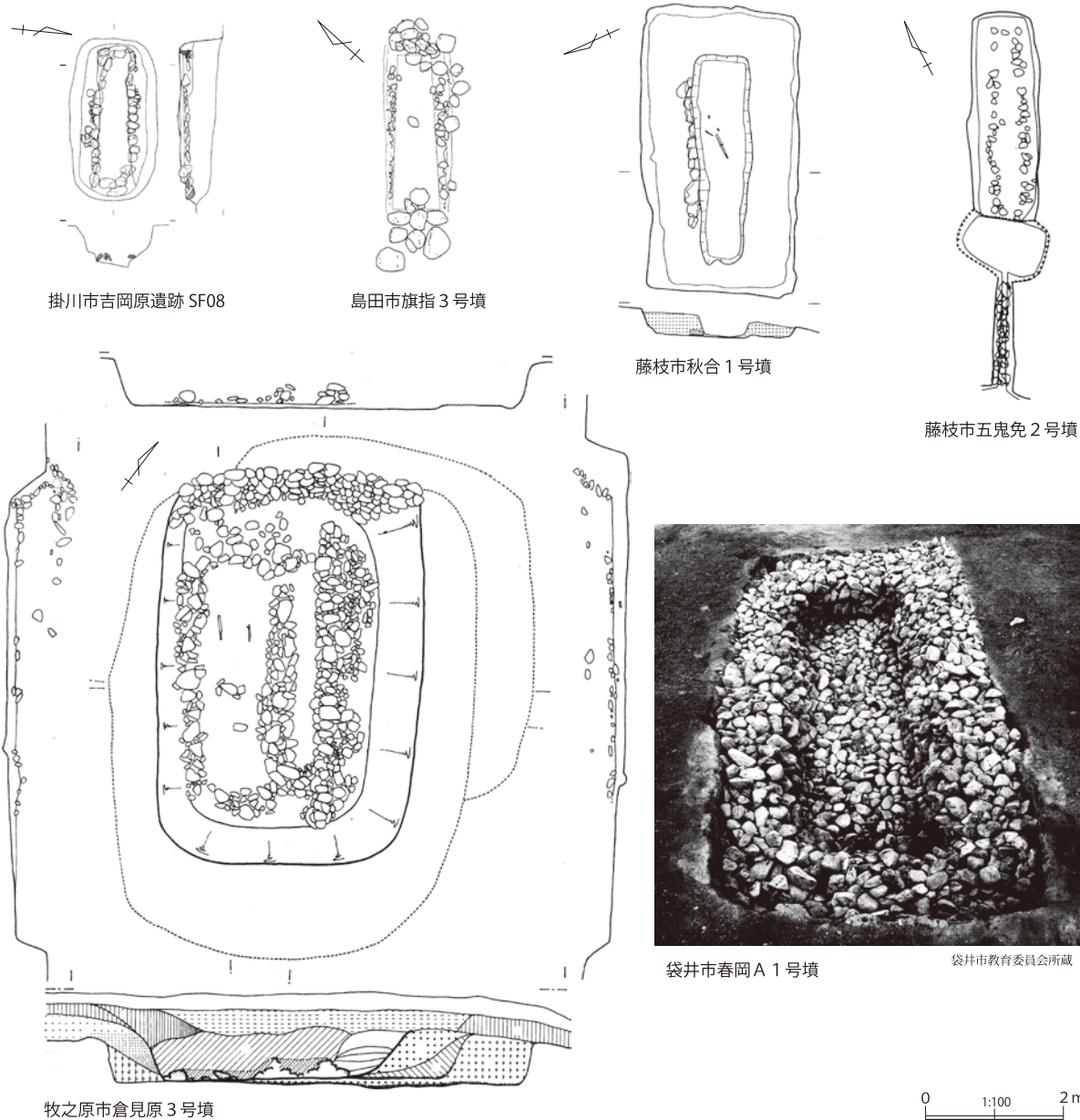


図8 前期の礫構造をもつ堅穴系埋葬施設2

て現れ、その後も遠江の中・東部から駿河西部にかけて、少数ながら小規模墳の箱形木棺を中心に展開したことがわかる。また、その展開の中で、一部の中規模墳に埋葬施設の長大化や礫の多量化を認めることもできる。なお、その一方で、前期後葉になると浜松市赤門上古墳（墳長約56mの前方後円墳）や島田市城山古墳（一辺16～20mの方墳）のように、割竹形木棺の小口に礫を用いた埋葬施設も現れている（浜北市2004、島田市1981）。

しかし、これらの埋葬施設に共通する点は、礫床ではなく、棺の周囲に礫を用いる構造にある。また、礫床があったとしても、棺周囲の礫と同等の礫を用いる場合が多く、八幡ヶ谷古墳などのような砂利敷きは確認できない。したがって、「礫床をもつ木棺直葬」との関係については、礫を用いた構造が展開する地域性としての評価は考慮されるが、これだけで系譜的なつながりを理解することは難しい。

前方後円墳における様相（図9） 磐田市新豊院山2号墳は、先述の同3号墓の東隣に立地する墳長約28mの前方後円墳であり、遠江における出現期（前期中葉）の前方後円墳である。三角縁神獣鏡1、小型鏡1、鉄刀1、短刀1、鉄剣5、銅鏃28、鉄鏃20、不明鉄器1

を副葬し、埋葬施設は竪穴式石室に分類されることが多い。しかし、その構造は割石積みや断面U字形の粘土床をもつものではない。構築墓壇の底面に粘土、礫、さらに粘土を平坦に敷き、その上に棺部分を残した周囲（壁体基底部）に粘土を貼る。壁体は、礫の敷き詰めと粘土の充填などの繰り返しにより構築される。さらに、壁面は礫により造られるが、その表面にも粘土が貼られる。断面形から箱形木棺の設置が推測できるが、天井石や粘土被覆は認められない（磐田市2006）。

この構造および形態の特徴については、長野県弘法山古墳などとともに既に注目されており、三木弘からは墓壇石壁の可能性（三木2007）、高松雅文からは類粘土礫の理解（高松2009）が示され、いずれにおいても、弥生時代に溯る無蓋または木蓋の竪穴式石室の諸例を含めた評価が検討されている。

前期後葉になると、大型前方後円墳（墳長約107m）である磐田市松林山古墳が築造される。墳丘の規模・形態や埴輪、豊富な副葬品（三角縁神獣鏡1、内行花文鏡2、四獣鏡1、巴形銅器3、琴柱形石製品1、石釧2、貝製釧2、多くの玉類、農工具、武器類）によって、近畿中央の王権との強い関係がうかがえるほか、割石積みによる長さ7mを超える長大な竪穴式石室を

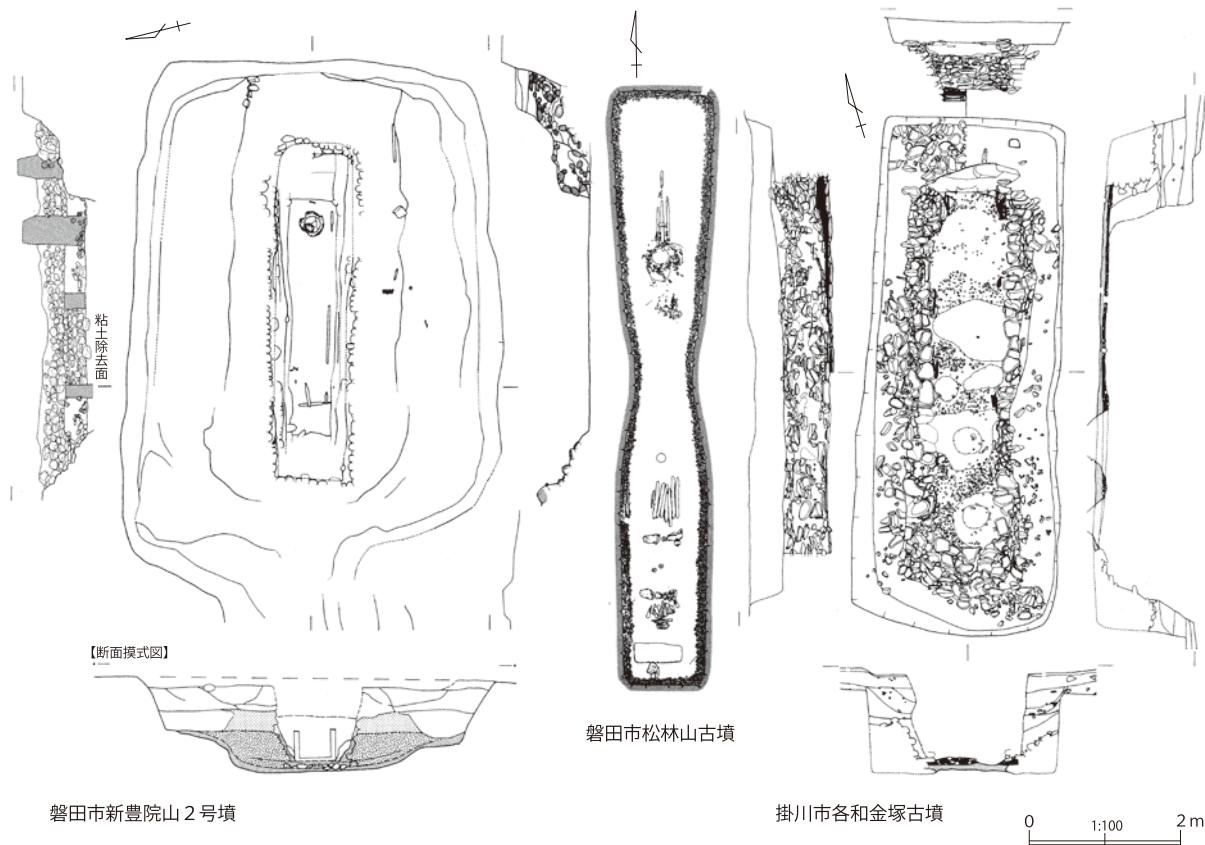


図9 前方後円墳における礫構造をもつ竪穴系埋葬施設

埋葬施設とする点についても、同様に評価される。天井構造には、天井石と粘土被覆が認められる。しかし、床面構造には粘土床を設けず、礫床である（後藤他1939）。三木弘は、竪穴式石室における東海・中部地方の地域的特徴の一つに礫床をあげており（三木1995）、松林山古墳もその特徴に当てはまる。

中期前葉では、墳長約66mの前方後円墳である掛川市各和金塚古墳において、礫構造が認められる。段築や葺石、埴輪を伴い、副葬品には多くの武器類や農工具のほか、刀子形などの石製模造品がある。埋葬施設は、長さ約4.8m、幅0.8m前後、高さ0.5m程の竪穴式石室であり、天井石を伴っている。しかし、壁面は割石積みではなく、床面に粘土床はない。壁体は、河原石である礫と粘土の充填による構造であり、壁面は礫積みによって構築されている。床面は、砂層によって水平面が設けられた上に、厚さ0.05m前後の礫敷き（砂利）が施された礫床であり、ベンガラ塗布も報告されている。また、この礫床面は平坦であり、箱形木棺の使用が推測されている（掛川市1981）。

これら3基の前方後円墳の埋葬施設は、同じ竪穴式石室に分類されるとしても、それぞれに個性的な構造を伴っており、一つの系列としては理解し難い。ただし、粘土貼り、割石積み、天井石などといった中・小規模墳にはない何等かの構造を伴っている点で、古墳時代の首長墳としての特別性を反映した埋葬施設であるという評価は可能である。さらに、壁体や天井の構造が個々に異なるのに対して、床面における礫敷き（砂利または礫）の構造は、3基すべてに備わっており、この点は、中・小規模墳における様相とは明確に異なる特徴として評価できる。そして、この礫床構造や箱形木棺を用いる場合が多いことについては、八幡ヶ谷古墳や志太地域の「礫床をもつ木棺直葬」にも共通する特徴として指摘することができる。

4 まとめ

八幡ヶ谷古墳の埋葬施設について、「礫床をもつ木棺直葬」として前期後葉以降の志太地域に類例を求めることができ、近い系譜的關係や特質にある可能性を評価した。さらに、磐田原台地では弥生時代もしくは前期初頭以降、その他の遠江中・東部や志太地域でも前期において、中・小規模墳に礫構造をもつ竪穴系埋葬施設の展開が認められるなか、前期中葉に出現する前方後円墳において、個々に異なる構造を採用しながらも、「礫床をもつ木棺直葬」と共通性のある礫床構造が

中期前葉まで認められることを確認した。

新豊院山2号墳の埋葬施設は、礫積みの壁面に粘土を貼ることから、木棺設置時の外観は粘土に囲われた墓穴になると復元できる。壁体の構造、構築技術に大きな差異はあるが、八幡ヶ谷古墳の場合も近い外観が推測される。また、八幡ヶ谷古墳の眼下に位置する上平川大塚1号墳は、新豊院山2号墳と近い規模の前期の前方後円墳であり、不時発見の経緯から詳細な構造を明確にすることはできないが、砂利による長さ約3.6mの礫敷き（礫床）と粘土を用いた埋葬施設であったことが記録からわかる（大谷2010）。先述のとおり、前方後円墳の埋葬施設は各々個性的な構造をもつことから、上平川大塚1号墳の埋葬施設の構造を詳細に特定することは躊躇される。しかし、礫床構造と粘土の使用は新豊院山2号墳と共通し、また八幡ヶ谷古墳にも当てはまる特徴である。

この2基の前方後円墳は、三角縁神獣鏡を副葬する。これに対して、「礫床をもつ木棺直葬」の諸例は前方後円墳ではなく、相対的に盛土の少ない墳丘構造であるが、若王子12号墳の車輪石（岩木2003）や八幡ヶ谷古墳の巴形銅器など、近畿中央勢力の背景をうかがわせる希少な副葬品も少なくない。また、二段逆刺鍔の多量副葬が倭王権の影響力を示し、象徴する儀礼用具であったという指摘もある（鈴木2003）。

以上から、八幡ヶ谷古墳などの「礫床をもつ木棺直葬」は、遠江中・東部の前方後円墳における礫床と粘土を用いた構造から派生した、または前期中・後葉から中期前葉にかけて連動するように展開した可能性を評価したい。そこには、近畿中央の倭王権の影響下にありながら、割石積みや割竹形木棺から語られるものとは違った地域の側面が示されていると考える。さらに、その背景として、古くから礫構造をもつ竪穴系埋葬施設が展開する地域、または、その周辺地域であることとの関連が考慮されるが、諸研究が示すような広い視野による歴史的評価を含めた理解も考えなければならない。

本稿を執筆するにあたり、滝沢誠氏、篠ヶ谷路人氏、岩木智絵氏、永井義博氏、白澤崇氏に御高配、御教示をいただきました。また、八幡ヶ谷古墳の調査時には、蔵本俊明氏、鈴木一有氏、杉山和徳氏に御協力、御教示をいただきました。明記して感謝申し上げます。

註

- 1 古墳時代の時期については、岩原2012などと各調査報告書等を参考にした。なお、以下は「古墳時代」を省略して記載する。
- 2 埋葬施設に関する用語については、高松2011や岡林2012、中嶋2001を参考にしたが、室・櫛や直葬の区分が判断し難いこともあり、多くは調査報告書の判断にしたがって記載した。また、各古墳の埋葬施設の名称（○号主体部、○棺など）についても、原則として各調査報告書にしたがった。
- 3 礫は、古墳などによって大小様々であるが、割石や板石に対して大局的に捉えるために、未加工の掌大程度より小さい石を総称することとした。その中でも特に小さい礫については、砂利と併記する。また、礫を敷いた構造について、本稿で扱う古墳では木棺の下に敷かれたものと把握されていることから、棺内礫敷（岩本2003）とは異なる「礫床」とした。
- 4 木棺痕跡と思われる礫床の僅かな段差は、調査報告書（静岡県2009）の写真図版により確認できる。また、その位置は実測図面に記録されているものを確認した。
- 5 調査報告書の作成時において、鈴木一有氏と杉山和徳氏にも御教示を受けているが、ヤリの特徴を観察することはできなかった。したがって、調査報告書（静岡県2009）でも鉄剣として報告し、その文中でヤリの可能性を指摘している。
- 6 この他に、浜松市神明社上1号墳（径約25mの円墳、中期中葉、浜北市2004）、菊川市長池4号墳（径約20mの円墳、中期中葉、菊川市2004）、藤枝市仮宿沢渡1号墳（径約13mの円墳、前期後葉頃、藤枝市2005）、藤枝市女池ヶ谷11号墳（一辺10m程の方墳、中期中葉、藤枝市1990）において同一墓壇の二棺併葬の可能性も考慮されるが、検出状況から判断する根拠に乏しい。
- 7 墳丘規模について、本稿では、中・小規模墳は概ね20m前後以下の円・方墳、小規模墳は概ね10m前後以下の円・方墳に対して用いる。なお、滝沢2003の「小型墳」は概ね本稿における中・小規模墳に該当する。
- 8 遠江・駿河（静岡県内）における竪穴系埋葬施設の諸様相については、松井1994、中嶋2001、滝沢2003などによって把握することができる。
- 9 島羽美古墳については、大塚1978と島田市1984のほか、調査資料の閲覧等について島田市教育委員会 篠ヶ谷路人氏に御高配いただいた。また、五鬼免1号墳と若王子古墳群については、八木1978と藤枝市1983・2007のほか、調査資料の閲覧等について藤枝市教育委員会 岩木智絵氏に御高配いただいた。
- 10 春岡A1号墳については、袋井市1998により概要が報告されているほか、調査資料の閲覧等について袋井市教育委員会 永井義博氏と白澤崇氏に御高配いただいた。

引用・参考文献

- 浅羽町教育委員会 1999 『五ヶ山B2号墳』
- 引佐町教育委員会 1983 『引佐町の古墳文化Ⅲ』
- 岩木智絵 2003 「志太平野における車輪石出土の意義について―若王子12号墳出土車輪石からの一考察―」『静岡県考古学研究』35
- 岩原 剛 2012 「東海」『古墳時代研究の現状と課題』上 同成社
- 岩本 崇 2003 「棺内礫敷をもつ組合式箱形木棺」『大手前大学史学研究所紀要』第3号
- 磐田市教育委員会 1977 『磐田67号墳調査報告書』
- 磐田市教育委員会 1982 『新豊院山墳墓群』
- 磐田市教育委員会 1992 『竹之内1号墓遺跡発掘調査報告書』
- 磐田市教育委員会 2003 『県道浜松袋井線緊急地方道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 磐田市教育委員会 2005 『新豊院山遺跡発掘調査報告書Ⅱ C地点の発掘調査』
- 磐田市教育委員会 2006 『新豊院山古墳群 D地点の発掘調査』
- 磐田市史編さん委員会 1992 『磐田市史』資料編 考古・古代・中世
- 大塚淑夫 1978 「島田市島羽美古墳」『静岡県における4～5世紀の墳墓について』静岡県考古学会
- 大谷宏治 2010 「上平川大塚古墳の研究」『静岡県考古学研究』41・42
- 小笠町教育委員会 1991 『寺の谷3号墳発掘調査報告書』
- 岡林孝作 2011 「木棺の諸形態」『古墳時代の考古学3 墳墓構造と葬送祭祀』同成社
- 岡林孝作 2012 「竪穴系埋葬施設（含棺）」『古墳時代研究の現状と課題』上 同成社
- 掛川市教育委員会 1981 『各和金塚古墳』
- 掛川市教育委員会 1987 『吉岡原遺跡発掘調査概報』
- 菊川市教育委員会 2004 『長池古墳群4号墳発掘調査報告書』
- 後藤守一他 1939 『静岡県磐田郡松林山古墳発掘調査報告』
- 西郷藤八（清書・補記：大谷宏治）2010 「『上平川大塚古墳明細書』」『静岡県考古学研究』41・42
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008 『森町円田丘陵の古墳群』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009 『菊川市下平川の遺跡群』
- 柴田 稔 1978 「島田市旗指3号墳」『静岡県における4～5世紀の墳墓について』静岡県考古学会
- 島田市教育委員会 1981 『城山古墳発掘調査（第三次調査）概報』
- 島田市史編さん委員会 1984 『島田風土記・大津編』

島田市史編さん委員会 2003 『島田風土記ふるさと大長・伊久身』

鈴木一有 2003 「二段逆刺鏃の象徴性」『静岡県考古学研究』35

高松雅文 2009 「埋葬施設の型式学的研究—粘土槨の編年的研究を中心に—」『2007年度共同研究成果報告書』大阪府文化財センター

高松雅文 2011 「木槨と竪穴式石室」『古墳時代の考古学 3 墳墓構造と葬送祭祀』同成社

滝沢 誠 2003 「志太平野における古墳時代前・中期の小型墳」『焼津市史研究』第4号

豊岡村教育委員会 2000 『大手内古墳群』

中嶋郁夫 2001 「主体部」『静岡県の前方後円墳—総括編—』静岡県教育委員会

浜北市教育委員会 2000 『内野古墳群』

浜北市史編さん委員会 2004 『浜北市史』資料編 原始・古代・中世

袋井市教育委員会 1972 『袋井市雲座古墳D単位群発掘調査概報』

袋井市教育委員会 1990 『若作遺跡 若作古墳群』

袋井市教育委員会 1996 『高尾向山遺跡Ⅱ』

袋井市教育委員会 1998 『見えてきた昔の春岡 はるおか遺跡群』

袋井市教育委員会 2004 『愛野向山Ⅱ遺跡・愛野向山B古墳群発掘調査報告書』

藤枝市 2007 『藤枝市史』資料編 1 考古

藤枝市教育委員会 1980 『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—古墳時代編—南新屋古墳群秋合支群』

藤枝市教育委員会 1983 『若王子古墳群』

藤枝市教育委員会 1988 『東浦遺跡発掘調査報告書』

藤枝市教育委員会 1990 『女池ヶ谷古墳群』

藤枝市教育委員会 2005 『仮宿沢渡古墳群・仮宿沢渡遺跡・仮宿堤ノ坪遺跡・仮宿堤ノ坪古墳』

増井義己 1978 「中部の現状と問題点」『静岡県における4～5世紀の墳墓について』静岡県考古学会

松井一明 1994 「遠江・駿河における初期群集墳の成立と展開について」『地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論集刊行会

三木 弘 1995 「竪穴式石室の基礎的検討—東海・中部地方の竪穴式石室の位置について—」『東京考古』13

三木 弘 2007 「墓壇石壁小考」『大阪文化財研究』第31号

焼津市教育委員会 1984 『焼津市埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ—昭和57年度—』

八木勝行 1978 「藤枝市五鬼免1・2号墳」『静岡県における4～5世紀の墳墓について』静岡県考古学会

山村宏・黒田勝久 1968 「榛原郡榛原町倉見原第3号墳調査報告」『東名高速道路（静岡県内工事）関係埋蔵文化財発掘調査報告書』静岡県教育委員会

図の出典

図1 国土地理院発行1:25,000地形図「下平川」を使用

図2 静岡県2009より編集、盾は浅羽町1999を使用

図3 静岡県2009より編集

図4 小深田西1号墳は焼津市1984、秋合6号墳・11号墳は藤枝市1980、磐田67号墳は磐田市1977、文殊堂8号墳は静岡県2008を使用

図5 筆者作成

図6 鳥羽美古墳は大塚1978、写真は島田市1984、五鬼免1号墳は藤枝市2007、若王子12号墳は藤枝市1983・2007を使用

図7 竹ノ内原1号墳は磐田市教1992、梵天H地点墳丘墓は磐田市2003、新豊院山3号墓と新豊院山2号墳前方部は磐田市2006、新豊院山C地点SK2は磐田市2005、大手内A15号墳は豊岡村2000を使用

図8 吉岡原遺跡SF08は掛川市1987、旗指3号墳は柴田1978と島田市2003、秋合1号墳は藤枝市1980、五鬼面2号墳は藤枝市2007、倉見原3号墳は山村・黒田1968、春岡A1号墳の写真は袋井市1998を使用

図9 新豊院山2号墳は磐田市1982・2006、松林山古墳は磐田市史1992、各和金塚古墳は掛川市1981を使用